



# 広報沼尾

# Vol. 1

2017年4月18日発行

医療法人社団洋精会 広報誌

URL : <http://numaog.or.jp/>

- ◇沼尾病院 ◇通所リハビリテーション ◇訪問看護ステーション星が丘
- ◇ケア工房野の花（居宅介護支援事業） ◇ヘルパーステーションぬまお（訪問介護）
- ◇地域包括支援センターきよすみ ◇小規模多機能型居宅介護よしのいえ ◇ぬまお内科



2階病棟



介護職員研修



屋上からの風景

癒しのすべをとりもどす著書  
医療法人社団洋精会 沼尾病院



院長 古谷 耕資郎

ジギタリス、不整脈の研究と独自の除細動器の開発で有名な心臓病専門医、また、核戦争防止医師会議を代表してノーベル平和賞を受賞した、バーナード・ラウン（Bernard Lowry）博士の著書 *Healing Lost Art of Heart*（1996）に興味深い一節があります（小泉直子訳「医師はなぜ治せないのか」、築地書館、1998年、第68～72頁。題名の訳には違和感がありますが・・・）。

博士の実母は96歳になります。狭心症発作をもちながらも、看護師を雇い、アパートで独居生活を送っていました。博士夫婦が同居を勧めても断ってききました。いよいよ最期の時が近づいたある日、新しい看護師が雇われました。ラウン博士は、前の看護師と同様、どんなことがあっても救急車は呼ばないように申し渡しました。彼が妻と共に昼食から戻ってみると、そこには変わり果てた母の姿がありました。以下訳文を引用します。

「母は真っ青で床に横たわっていた。口には気管チューブが挿入され、あごは白い泡でおおわれ、顔は紫色に腫れていた。静脈に打たれた注射薬は行き場がなく、そのため両手が腫れ上がり、皮膚はすでに死を示す蠟のような蒼白に変わっていた。屈強でたくましい男たちが彼女の胸を押し、死んでしまった心臓に除細動器を当てて通電していた。まったくぞつとするような光景で、カフカの悪夢を見ているようだった。」

もちろん、博士はただちにこのおぞましい行為をやめさせます。しかし、周到に準備をして母親に満ち足りた人生を安らかに終えてほしいという博士の思いは、「死に對して愚かな闘いをいどむ忌まわしいロボット化したシステム」によって水の泡となつてしまいました。

博士は、医師は、死に對して猛然と戦うべき場合と、闘っても人間の品位をそこなう無駄な行為になる場合の区別がつくように経験を積むべきだと述べています。

この章は、このほかにも死と臨終についてさまざまな例を挙げて、よい死とはなにか、医師はどうかかわるべきかを問いかけています。正解はないのですが、高名な専門医が経験したことを共有することは無駄にはなりません。

少なくとも、数人の医師・看護師、外部の有識者から成る倫理委員会を開催して家族、本人を交えて合議して結論を出し、記録に残しておくような最期の医療の決め方には違和感を覚えます。





